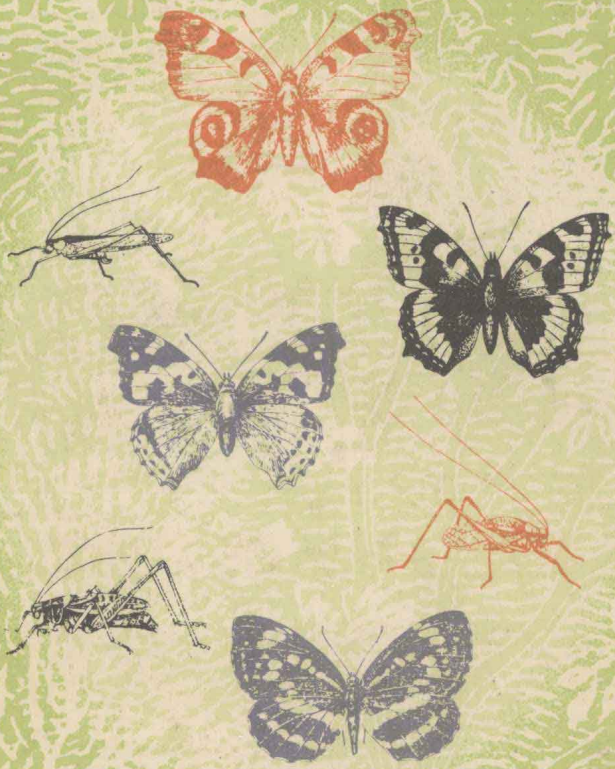
毛虫の舞踏会

堀口大學 訳



毛虫の舞踏会

堀口大學 訳

講談社

毛虫の舞踏会

昭和五十四年三月二十日　第一刷発行

定　価　一〇〇〇円
訳　者　堀口大學
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二
電話東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)　振替　東京八―三九三〇
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社

落丁・乱丁本はおとりかえします。

© Daigaku Horiguchi 1979, Printed in Japan.

0097-129776-2253 (0) (翻)

目

次

世代の争い（デュアメル）……7
毛虫の舞踏会（ブデル）……15
海中を翔ける鳥の話（アヴリン）……31
母親（ルイヤール）……39
鵞鳥の友（ドルジュレス）……51
少年パタシュ（ドレーム）……57
象の墓地（ミル）……73
獅子の屠所（ロニー兄）……79
リス（コレット）……85
キリアキ（ティナイエール）……93
水泡と蜘蛛（ヴィルドラック）……99

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

秣槽の牡牛と驢馬（シュペルヴィエル）……103
エジプトへの逃亡（シュペルヴィエル）……131
沙漠のアントワーヌ（シュペルヴィエル）……145
少女（シュペルヴィエル）……157
ノアの方舟（シュペルヴィエル）……169
ある競馬のつづき（シュペルヴィエル）……187
獅子狩（フィリップ）……197
白い獣（シャンソン）……205
講談社版のあとがき……223

装丁／辻村益朗

毛虫の舞踏会

世代の争い

ジョルジュ・デュアメル

「三つで若犬。六つで良犬。九つ老犬」これが諺だ。ディックは満八歳と少々になったので、僕らはそろそろもう彼の隠退の準備を始めてもいい時分だと気がついた。こう言ったからとて、決して彼が、その務めを怠るわけではない、まだまだしっかりしたものだ。ただ彼は、肥満して来た、近頃彼は耳がいくぶん遠くなって来た、微風の気まぐれ次第で、彼は所かまわず毛を飛ばす。彼は絶えず眦に涙を一滴ためている。こういった事柄は、結局何事かを意味しているわけだった。

どこにも非の打ちどころのない立派な勤人だったディックが、周囲の尊信のうちに安らかな老後を送るであろうことはもちろんだが、とにかく、彼の後継者を準備することが必要だった。こんな次第で、カストールが僕らの世界に現われたのだ。

若きカストールの出現、それに対する老犬ディックの驚き、悩み、嫉妬、または英雄的なその我慢については、日を改めて語るつもりだが、それはアトリード王家の因果話や、デンマークの王子ハムレットの不幸と、変りないほど興味があるのだが、ただ今日筆者の注意は、真に今日の問題、事実焦眉の急に迫られている問題に向けられる次第である。

カストールは、まだ一歳半にしかならない。もう大きくもあり、筋骨もたくましく、疲れを知ら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ず、一人前の声も出れば、相当多数の物体や場所を名誉づけるために肢も上げはするものの、何といってもまだこれは小僧でしかない。ディックはそれを知っている。カストールがまだ、「お役」には立たないと、ディックは心得ている。だからディックはまだ、今日まで自分の職分のどの一つからも身を引いてはいない。彼はなすべきことはすべて自分一人で果たしている。血気盛りの時分のように。もっともこれは、彼の好むところでもあるのだと、僕は思っている。そればかりか、僕はこうとまで思っている、彼が熱心に引受けて、人が少年カストールにやらせるような慰み半分の仕事、たとえば夜、門や戸口を閉めてしまったあとで、鍵を二階へ上げて片付けたり、買出し用の籠をくわえて持ち運んだりするような事までも、喜んでするだろうと。嘘だと思ったら彼に鍵を預けてみるがいい、彼に買出し用の籠をくわえさせてみるがいい、この老犬は嬉嬉として自分が若き世代に属する犬達より決して愚でもなく、また決してスポーツ嫌いでもないことを、立派に見せてくれるだろう。

あの小僧が来た時以来、彼は今日までずいぶん、以前のように眠ってばかりいる代りに、遊んだり駆けまわったり、相撲をとったり、喧嘩をしたりして、相手と調子を合わせるために、想像も及ばないほどの、努力をしているのだった。おかげで彼は痩せた。彼は実際若返りもした。この小僧との接触は、彼にとっては、必ずしも苦悶であり落伍であるとのみは限らなかった。否否、そうでないことを、彼自身も感じていた、機会あるたびに、彼は鷹揚に尾を振り動かして、この見解に同意を示すのだった。

ただ、若き世代が、引受けて警護に立つ自分の順番を、急ごうとしないことは明白な事実だっ

た。若き世代は義務について、決して暴君的と呼ぶにふさわしいような鞏固な観念は持っていなかった。若き世代は、こんな事は、いやその他の事も、つまり何もかも、相当軽蔑しきっていた。夜、舗装道路を足音が鳴らすにつけ、馥郁とした香りを立てる花ざかりの水蠟樹の下で、恋猫どもが呼び交わすにつけ、十二月の大霜以来、離れていた石の一片が、石垣の天辺からひとりでに、夜の沈黙の中に、落ちて来るにつけ、彼女の小さな家畜小屋の奥で、牝山羊が溜息を洩らすにつけ、ディックは早速、老いていよいよ元気な脚の上に立ち上っていた。彼は、二声三声まず吠えると、下士官のようにぶつくさ小言を言いながら、小庭を一めぐりし、身軽に上の庭を足早に偵察し終ると、踏段の上へ戻って来て、体を輪にして、事件の発展を待っている。カストールの方は、動こうともしなかった。それで一体職務は果たせるのか？　職務なんか、可笑しくって！　カストールは平気だった。理由は、彼が自分がまだ丁年未満だと承知しているためばかりではなく、おおかたそれはカストールが「平気な」世代に属しているがためだった。と言うと、若き世代は毎晩犬舎の奥に静かに眠って、おとなしく身に脂をつけることだけしているように聞えるかも知れないが、事実はなかなかそうではないのだった。カストールは、夜になると、あちらこちらと、出鱈目に、ちょいちょい歩きまわってドアに体をこすりつけたり、蝙蝠を追いまわしたり、面白半分、月や、自分の影や、木霊に向って吠えたりするのだ。彼は通るかぎりの自動車に、途方もなく甲高い演奏会をして聞かせるのだ。彼はいかなる規律も認めなければ、規則立った仕事もしようともしない、藪の中へ飛び込んでは嘘をし、花壇を荒し廻り、機会あるごとに、法律と常識を蹂躙する。

ディックは、すべてこれらのことを眺めている。彼はやさしく寛容な尾を動かして言う、「若いんだもの」と。ただ彼は、心の奥では思っているのである、「情けない世代だこと！」と、こう。

争いの起るのは、何といっても、（大新聞の学者先生達の筆法を用いて言うなら）それは経済的分野と呼ばるべき点においてだった。カストールは、米国学派だった、彼の所得の全部を食べてしまう。食べてしまうですって？　いや、僕は言うべきだった、彼は消費してしまうと……。カストールは事実また、相当高度な「生活程度（スタンダード・オブ・リヴィング）」を持っていた。これはまたなんと素晴しい言葉だろう！　カストールは口をひらいて、人が与えるものは、全部受け入れる。できるなら彼は、与えられるより以上に受け入れたいのだ、五十フラン持っていると、三百フラン使ってしまう向う見ずではあるが、その代り極めて近代的な人達のように。カストールは即時の享楽以外には何も考えない世代に属しているのである。

幸いなことに、ディックはこの世代には属していない。これは情けなくもフランス的な犬、貯蓄と後顧の憂いを無くすることだけしか考えない犬である。ディックの世代にあっては、人は常に働いたものだった。いくらか残すために、人は感心に必ず未来のことを慮（おもんぱか）ったものである。ディックがもし、極めて小さい一塊を受取った場合、彼ももちろん、若きカストールと同じように咄嗟（とっさ）にそれを嚥（の）んでしまう。これは犬の悲しさで仕方のない事だ。ディックがもし、相当大きな一塊を受取った場合、人はディックがそれを嚥（の）んでしまうとは言うことはできない。彼はそれを食べるのである。彼はそれを味わうのである、しかも静かにこれをするために、彼はまず遠く

へ行くことから始める、悪魔に憑かれた者ども、ことに若き世代から逃れるために用意された隠れ家へと行くのである。ディックがもし、本当に大きな一塊、重要な一塊を受取った場合には、すべてがこれと一変する。すなわちディックは未来を慮る。彼はそれとない様子で、人目につかないように席を外す。彼は五分間いなくなって、やがてまた戻って来る、顔を土だらけにして。ディックは銀行へ貯金に行って来たのである。別な言葉で言うなら、彼は庭の隅へ行って、そこに穴を掘ったのだ。彼は一日分の食料をそこに隠して、丁寧に土をかけて来たのである。ディックは当世風の軽薄者では決してなかった。ディックは災厄の日のことを考える。彼は慮りある賢者だ。ディックは、濫費家カストールを、尻尾の先に浮べたにこやかな微笑で眺めている。

不幸なことには、時々ディックの身の上に、不愉快なアヴァンテュールが持上る、ことに最近それが繁くなった。時々ディックには、貯えて置いた食糧が見つからないことがあった、理由は若き世代がそこを通り過ぎたり、または別の金融業者が、この老犬の貯金の頭をはねて実験の具に供したり、また時にはこの用心深い老人が、自分の金庫の番号を忘却してしまったりするからだった。ある時は、ディックに、隠した場所はせっかく見つかっても、すべてが腐敗して役に立たなくなっていることもあった。言わばこれは恐慌のようなものだった。ディックは思い悩んでいる、深く思い悩んでいる。投資の方法が悪かったのか？　誰を信じたらよいものなのか？　善い行いが報いられないという法があるだろうか？　たとえそうだとしても、尊い伝統はどのみちやすやすと見捨てるわけには行かなかった。

何事が起ろうと、ディックは相変らず節約と貯蓄をつづけている。そればかりか、彼は男々し

くも自分の考えが誤っていないと信じ切っている。彼はやさしさのこもった同情の気持で、日が暮れさえすれば床に入り、六時間労働を要求し、受取る給料はすべて濫費し、美徳を軽蔑し、どうやら超現実主義者で、勝手気儘で、乱暴で、ふしだらで、無頓着な、若き世代を観察している。

ただここで、ディックに分らないのは、ディックに分り得ないのは、やがて未来の一日、怖ろしく遠い一日、人間の未来にも増して、いっそう測り知り難い犬族の未来の暗黒の奥に隠れたその一日が来ると、その時、老いたカストールは、真面目になり、倹約になり、未来の慮りもあり、いろいろ癖が出たり、わけ知りにもなったカストールは、今の自分と同じような涙ぐましい目つきで、何という名かは知れないが、とにかく若き世代が持つ愛すべき、そして許し難き欠点のすべてをその身に具えた、一匹の若犬を眺めるはずだということだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.